

CHIT CHAT RADIO 子育てCHAT ROOM

2023年11月21日15時12分～15時39分



現役医大生が語る！勉強以外の活動と将来の目標とは

—子育て世代に向けてお送りする子育てチャットルーム、香川大学医学部助教、鈴木裕美先生に子育ての悩みや疑問を伺ってまいります。鈴木裕美先生、こんにちは。

(鈴木) こんにちは。

—こんにちは。よろしく申し上げます。

(鈴木) お願いします。

—そして、今回は香川大学医学部の学生さんにもスタジオに来ていただいております。

—今日はスタジオがより賑やかになってます。それでは自己紹介していただけますか？

(大森) はい、香川大学医学部医学科二年の大森純一郎です。沖縄県出身です。内科の総合診療を目指しています。

(檀特) 香川大学医学部医学科三年の檀特龍樹です。兵庫県神戸市出身です。心臓外科などバリバリに頑張りたいなと思ってます。

(森永) 香川大学医学部医学科三年の森永一輝です。福岡県出身です。私は小児科を目指しています。鈴木先生がいるからというわけではないですが(笑)。

—よろしく申し上げます。今回この三人に来ていただいたのは、十月六日七日八日の三日間、香川大学医学部祭の企画『医学部 Radio』で病院ラジオをやったからなんですね。

—鈴木先生、まずどうしてこの企画を始めることになったのですか？

(鈴木) 今までやったことがない企画ですね。コロナで実行委員になった方々は初めて医学部祭を経験したんです。過去のことを知らずに一から学祭を作った形ですね。

—その中でこの医学部ラジオをしようと思いついたわけですね。

(鈴木) 私がラジオに出ているのでお話に来てくださったんですが、普段ラジオを聞かないのに、なぜラジオに着目したのか不思議だったし、すごいなと思いました。

— 三人ともラジオは聞いたことはないのですか？ラジオがあるのは知ってましたか？

(大森) もちろん、知っていますが、あまり聞かないです…。

— 沖縄でもRBCやラジオ沖縄などありますから。いい番組やっていますよ。方言の番組など。

(大森) やっていますね。私が小さい時は両親が運転する時にラジオをよく聞いていました。

(鈴木) それで、なんでラジオだったんですか。

(大森) 今回の企画を立ち上げてくれたのが檀特君なので、その点についてお願いします。

(檀特) はい。医学部キャンパスのすぐ横には病院があります。医学部祭では結構音が出ますが、病院に入院されてる患者さんは医学部祭に行くことはできず、音しか聞けません。患者さんとは距離は近いのに、なぜか遠くて壁を感じていました。この現状に私は引っかけり、医学部祭と患者さんを繋ぐ架け橋を作りたいと思いました。その一環で医学部ラジオという形で、我々からは学祭の情報を届けて、患者さんからは楽しいことや好きなことについてのお話を共有してもらい、直接は会えないけど繋がることのできる場を提供しようと考えました。そのためにも多くの方々に協力をしていただきました。

(鈴木) 良いですね。

— ちよっと鈴木先生、もう単位あげてください(笑)。よろしくお願いします。医学部祭で盛り上がりつつ楽しい音が漏れ聞こえてくるけれども、患者さんは行くことができないのは、すごく取り残されてるという感じがするという点に気づいたのですね。

(鈴木) なぜそこに気づいたの？

(檀特) そうですね。五、六年生は実習生として病院に行くのですが、私達はまた三年生二年生なので病院に関してあまり知りません。ですが患者さんにも楽しいことしてもらいたいなと少しでも嬉しいことを日常の中で見つけていたみたいなと考えました。

(鈴木) うわー！いい医者になるわ。

— 患者さんに寄り添っていますね。恭子さん、ラジオをする時は、どんなコンセプトの番組かやテーマをどうするかや中身構成などを考えないといけないですね。

—そうなんですよね。全部一から？

(檀特) そうです。ほとんど一から考えましたが、どうやってラジオをやるのか、やはり大きな機材があるのかなどが全く分からなかったので、鈴木先生にどういうふうにやったらいいのかアドバイスをもらい、鈴木先生には本当にお世話になりました。

—先生はなんと答えたんですか？

(鈴木) 私はラジオの機器をお貸しするような力はないので、クラブハウスなどのアプリを使ってはどうかとアドバイスしました。

—放送局というような形を取らずとも、今は皆さんで発信できるツールは多くありますからね。

(鈴木) そうですね。お金をかけずにラジオ風に見えるかと思いました。結局はYouTubeになりましたよね。

(大森) はい。最終的にはYouTubeで放送しました。

—檀特さん、実際一から作ったということですが、台本なども全部作ったのですか？

(檀特) いえ、今回の学祭で私は企画局長として枠組みを作っただけなんです。このラジオ企画をなんとかしてもやりたいと思っていたので、大森と一緒にやってほしいと依頼して、二人で企画しました。患者さんに募集するお便りのテーマで書きやすいものは何かなどを考えました。お便りのテーマは「映画の好きなワンシーン」や「思い入れのある曲」「あの人に伝えたい想い」、小さい子向けには「将来の夢」などを募集することにしました。このように二人で大きな枠組みを作った上で、森永などが協力してくれて形になりました。

—実際ラジオで喋られたのは大森さんと森永さんということですか？

(大森) はい。パーソナリティーとしては私達二人で務めました。

—すごいですね。実際何分ぐらいの番組を放送したんですか？

(大森) 三日間連続で放送させていただいたのですが、一日目が三十分、二日目、三日目がそれぞれ一時間でした。実際にやってみると意外と長く喋れるものだということに驚かされました。

—恭子さん、恭子さん、ちよろいらしいです(笑)。

(大森) そんなことはないです(笑)。いやいや違うんですよ。やっぱり素人の中でやってるんで、プロの放送とは違いますから。

(森永) 大森が途中で放送を抜けた時がありました。私ともう一人で、かなりグダグダになって逆に少し早く終わりました。

—そうですか、実際YouTubeですから、映像も込みになりますよね。

(大森) そうですね。実際に喋ってる映像を流しながら、聞くだけで内容が分かる物を作りたいだったので、その両方を意識しながら番組を作らせていただきました。

—実際に患者さんなどからメッセージも来たんですよね？

(大森) この企画は一年目で、知名度が低いと自覚していたので、お便りが一通、二通でも来れば十分だと思っていましたが、実際は三十人以上の方々からお便りをいただきました。また、病院内の患者さんに加えて、ありがたいことに職員の方々からもお便りをいただきました。

—お便りの中で印象に残ったものはありますか？

(大森) やはり印象に残ってるものは「あの人に伝えたい想い」というお便りテーマの中で、ある患者さんが実習生への感謝を綴ったお便りです。「実習生の方々に私は明るくしてもらえたよ、ありがとう」という感謝の想いが非常に心に残っています。

—森永さんは？

(森永) 私は「くすっと笑える話」というテーマのお便りの中で、子どものほんわかしたエピソードがとても良くて印象に残っています。子どもが好きなので。

—小児科医志望ですもんね。それは、入院されてるお子さんのお話ですか？

(森永) おそらく職員さんの三番目の子どもさんのお話だと思われます。

—檀特さんは聞いていて印象に残ったものはありますか？

(檀特) そうですね。私は「あの人に伝えたい思い」というテーマの中で「一緒に頑張ろうよ。一緒に頑張っどどこに旅行に行こう」というエピソードあり、やはり患者さんに寄り添うような医師になるのは素敵なことだと思います。

―鈴木先生、この医学部ラジオが学生さんにとってとても良い経験になっているようですが。

(鈴木) はい。医学部では勉強ばかりで、実際医者になった後のことや本の向こうにいる患者さんのことを想像したり、人間としてお付き合いをするというイメージがあまり持てません。しかしそれを学生の間に分かろうとすること、そのための体験を考え付くことがとても素晴らしいと思いました。

―実際の周りの先生方や同級生、先輩後輩も含めてどのような反応がありましたか？

(大森) 皆さんからは前向きで好印象な反応を受けました。同級生からすると身近な人がYouTube Liveで人前に出てこういう企画をして「面白いことしたんだね」といった声をいただいたり、今回お世話になった先生方からも「初めての放送とは思えない」と自分で言うのもなんですが、このような好評をいただき、企画代表としてもありがたかったです。

―今回は学祭の企画でしたが、今後も続けてほしいというような反響ですよ。

(大森) そうですね。このまま続ければといったお声かけも実際頂いています。

―私も入院した時にラジオを病室に持ち込んで聞いて、私の場合は番組を聞いてただけですが、身近な方が語りかける、知ってる人の話題がそこに出てくると、やはり親近感や共感が全然違いますよね。励みにもなりますよね。また、将来の先生方の人柄も分かたりもしますから、今後もこの企画は続けてほしいですね。

―今はお医者さんを目指して猛勉強中ですが、最後に将来どういうお医者さんになりたいかを聞きたいと思います。では大森さんからお願います。

(大森) 私は将来「大森先生なら、任せても大丈夫だろう」と患者さんに信頼してもらえようになればと思います。あの先生「だから」で済むというお高い感じではなく、あの先生「なら」大丈夫だろうというふうにも思ってもらえる医者になりたいなと思っています。

―その信頼感大事です。

—ちよっと病院行っても診察時間たっぷり取ってくれそうですね。

—顔見ただけでも本当に調子が良くなりそうですね。

(大森) ありがとうございます。

—檀特さんはいかがですか？

(檀特) 私は、患者さんは色々な不安を抱えて病院に来ると思いますが、その不安を全て和らげ、取ってあげられるような医師になりたいと思っています。技術的なことはま全くわからないですが、「先生ちよっとこれ見てほしい」と言われて「分かった見るで」って言って「これが原因やからこうしたら治るよ」って目を見て寄り添うような医師になりたいです。

—優しい。医療の現場でハードとソフトがあったら、ハードだけじゃないわけです。手術だけじゃなくて心の面もしっかりと兼ね備えていて、楽しみですね。

—楽しみですね。そして森永さんはいかがですか？

(森永) 私も患者さんに優しくしたいですし、病院が嫌なとこじゃなくなれば良いと思っています。子どもはとも純粋なので、病院を楽しんでもらうのは無理かもしれないですが、少しでも行きやすい場所にして、さらに子どもの未来も良いものにしていきたいなと思っています。

—やはり病院には、痛いことや少ししんどいこともありますね、「森永先生に会いに行く」みたいな子どももいるはずですね。

(森永) とてもいいですね。

—日本にとっては子ども達は本当に宝ですから。福岡出身の森永さんには、是非香川で小児科医を目指していただきたいですね。

(鈴木) 是非是非。

—大森さんも檀特さんも香川にいてほしいと思いますね。鈴木先生、今までの学生さんのお話を聞いてきてどうですか？

(鈴木) 私が医学生るときは、小児科医とか外科医になりたいなど、自分目線でこうしたいと

言ってましたが、みなさんはまだ二年生三年生なのに、患者さん目線でこんな医師になりたい
と言っていて感心しました。

—いい学生さんを香川大学医学部は育てていると言つことですね。これは鈴木先生のおかげ
とついで。

(鈴木) はい、私のおかげということですね。(笑)。ありがとうございます。

—ということで今日はいつもと違った子育てチャットルームになりましたが、これから勉強
も忙しいと思いますが、こつやつてスタジオに来てくださると良いですね。

—是非とも、これからも気軽に。今日は楽しい時間を過ごすことができました！

—ありがとうございます。

(学生一同) ありがとうございます。

—では鈴木先生、今後の予定をお願いできますか？

(鈴木) はい。不登校の子どもが家で学べるオンラインの塾や学習ツールの紹介と仕事のスキ
ルを学び、職場体験できるスキルマルシェの紹介をZOOMで行います。十二月十一日(曜日)
十時半から、お申込みはNPO法人親の育ちサポートかがわのホームページ、セミナー案内か
らお願いします。

—はい、また、子育てチャットルームでは鈴木先生に聞いてほしい話や相談したいことなど、
どんなことでもお待ちしております。鈴木先生、今月もごうもありがとうございます。

(鈴木) ありがとうございます。

—そして、香川大学医学部の皆さんにも集まっていたきました。ありがとうございます。

(学生一同) ありがとうございます。

—ごうもありがとうございます。以上、子育てチャットルームでした。